

Q32 専門機関(大学や病院等)との連携に関して

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

A君のお母さんは、幼い頃からA君を育てにくいと感じていました。幼稚園では、言語の遅れや集団に入れないことを指摘されましたが、小学校はあえて通常の学校に入学させました。それは、地域の小学校で他の子どもたちから様々な刺激を受けて生活する方が、本人にとって良いと考えたからです。しかし3年生になった現在は、通常の学級で学習することに様々な課題が出てきています。このような場合、保護者に専門機関での相談を勧めることも必要になります。保護者の気持ちを受け止めながら、専門機関等に相談することのメリットをていねいに説明し、相談後は保護者と専門機関との調整役をしながら連携をとることも大切です。

〈このような場合の支援 1〉

B君は3年生になりました。担任やクラスの友だちが変わったことで落ち着きがなくなり、離席が目立つようになりました。保護者は、担任やクラスが変わったせいだと思っていましたが、2学期になってもB君の行動は変わりません。そこで、保護者に子どもの様子を詳しく知ることを目的として、教育相談室など身近にある専門機関を紹介しました。

その結果、B君には知的発達に軽度の遅れとアンバランスがあり、記憶による学習は得意ですが、考えたり意見を交換したりする学習は苦手であることがわかりました。そのため3年生になり、学習がますます難しくなったことで、落ち着かない行動が目立つようになったこともわかりました。さらに、うまく友だちとも遊べないために、クラスで疎外感を持っていることも分かってきました。保護者がB君の状態を受け入れていくには時間がかかりましたが、相談室で保護者もカウンセリングを受けることで、B君を受け止められるようになり、本人のために知的障害特殊学級に入級させることにしました。

〈このような場合の支援 2〉

C君は、小学校3年生の途中で「学校に行きたくない」と言い出しました。学校と保護者が相談を進める中で、保護者が医療機関での受診を行った結果、高機能自閉症と診断されました。中学年になり、他の子どもたちのグループ意識が育つ中で、C君は上手な友だち関係が作れずに浮いてしまったのです。ひそかにいじめも起こっていたのですが、C君はいじめとは理解できずにいました。

医療機関では、服薬による医療的な治療を行い、学級では担任による他の子どもへの指導や様々な環境整備を行うことによって、C君はまもなく学校に行けるようになりました。

このように、医療機関での受診と、投薬による治療後の学校生活の変化を見るためには、学級担任の観察が重要になります。そして、その観察結果を保護者や医療に情報提供していく点からも、学校と家庭と医療機関の連携は、高機能自閉症児の問題や課題を理解する上で非常に大切なことです。

学級担任の記録(メモ)

<項目の利用回数>



月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子